

J R岩見沢駅の駅前広場のシンボルツリー

～「生きている化石」メタセコイア～



J R岩見沢駅の駅前広場にそびえる1本の大きな木。冬にはライトアップされ、クリスマスツリーとして、市民はもとより駅を利用する人の目を魅了しています。この木の名前はメタセコイアといい（学名 *Metasequoia glyptostroboides*）、J R岩見沢駅のシンボルツリーであるとともに、石狩炭田の「石炭」のもととなった木で、「生きている化石」と言われています。メタセコイア全般に関わる話と、この駅前広場のシンボルツリーにまつわる話を、以下のとおり、ご紹介します。

①メタセコイアとは

1941年（昭和16年）、京都大学理学部講師であった三木茂氏が、セコイア属やヌマスギ属とされていた化石や植物遺体のなかに、それらとは違う特徴をもつものを発見し、新たにメタセコイア（*Metasequoia*）属を設けました。日本では約80万年前に絶滅しており、現存していないものと考えられていました。

ところが、1946年（昭和21年）、中国四川省の湖北省境に近い長江の支流の村、磨刀溪^{まとうけい}で、メタセコイアの現生種としての木が初めて確認されました。このようなことから、「生きている化石」と言われています。

②昭和天皇とアケボノスギ

1949年10月8日、カリフォルニア大学 R.W.チェイニー教授から天皇陛下にメタセコイアの苗木が献上され、吹上御苑^{ふきあげぎょえん}の花陰亭^{かいてい}の南側にこの苗木が植えられました。昭和天皇は、このメタセコイアをこよなく愛し、メタセコイアの和名である「あけぼのすぎ」を大切にされていました。1987年（昭和62年）の歌会始^{うたかいはじめ}のお題は「木」でありましたが、昭和天皇はこの「あけぼのすぎ」を詠まれました。

「わが国のたちなほり来し年々^{としとし}にあけぼのすぎの木はのびにけり」

なお、この歌会始は陛下にとって最後の歌会始となり、2年後の1989年（昭和64年）1月7日、崩御されました。

③ 駅前広場への移植

駅前広場のメタセコイアは、岩見沢市7条9丁目に所在していた岩見沢道有林管理センター（現「空知総合振興局森林室」の前身）の旧敷地に、1957年（昭和32年）当時、岩見沢林務署だったところに前庭に植栽されていた2本のうちの1本で、1997年（平成9年）4月26日に、岩見沢市がJR岩見沢駅の駅前広場に移植したものです。

2本並んで植えられていたため、片枝が発達できず、今でも完全な円錐形状の樹冠を呈していないのは、その名残です。

移植時の樹齢は40年（平成30年現在では樹齢60年）、高さ18.6メートル、幹の太さは43センチメートル、幹周りは125センチメートルでした。2年がかりの根回し作業後の移植でした。

岩見沢道有林管理センターの旧敷地からの移植作業中に、ご近所住と思われるご婦人が、横倒しになったメタセコイアの梢（木の幹の先端）の部分をしきりに触っているのを、何をしているかと作業員が尋ねました。するとご婦人は、「駅前広場に移植されたメタセコイアの、あの梢に触ったことがあるのは私だけだと自慢するため、触っているのです。」と答えたそうです。このようなエピソードを当時の岩見沢道有林管理センター所長であった波佐光将氏から伺いました。

参考文献：メタセコイア 中公新書 1224 齊藤清明（1995）

元岩見沢道有林管理センター所長 波佐光将氏談（2016）